

発行所  
田無神社社務所

〒188-0011  
東京都西東京市田無町3-7-4  
TEL 042-461-4442

編集発行人  
賀陽智之



# 田無神社

第47号

水無月

## 令和8年夏越大祓式

どなた様でもご参列頂けます

田無神社では、毎年6月30日に「夏越大祓」ならびに「鎮火祭」の神事を斎行しております。

「夏越大祓」は、日々の暮らしの中で知らず知らずのうちに身に受けた罪や穢れ、災いを、半年の節目にあたる6月30日に祓い清め、残る半年も健やかで平穩に過ごせるよう祈念する、日本の伝統的な神事です。

夏越大祓では、神職と参列者がともに「大祓詞」を奏上し、神職の先導により茅の輪くぐりを行います。さらに斎場を焚上場へ移し、「鎮火祭」を執り行います。

### 【日時】

令和8年6月30日（火）

午前10時・午後1時・午後4時

（計3回斎行）

※本年も昨年同様、多くのご参列が見込まれるため、3回に分けて斎行いたします。各回とも神事の内容は同一ですので、都合のよろしい時間にご参列ください。

茅の輪の設置について

例年通り、参道に「茅の輪」を設置いたします。設置期間中は、茅の輪をおくぐりいただき、身体健全・疫病退散をご祈願ください。

※設置期間：令和8年5月30日（土）～6月30日（火）

人形の配布について

人形（ひとがた／形代）に氏名（ふりがな）・生年月日をご記入のうえ、ご自身の身体を撫でてお清めいただき、息を吹きかけてください。その後、人形を専用の袋に入れ、ご住所とお名前をご記入のうえ、社務所までお持ちください。お預かりした人形は、6月30日（火）の夏越大祓式において、浄火にてお焚き上げいたします。なお、人形（ひとがた／形代）は、5月30日（土）より社務所にて無料で配布しております。

人形に名前（ふりがな）と生年月日を書く



体（特に具合の悪い部位）をなでて半年間の穢れや罪を人形に移す



祈念を込めて人形に息を3回吹きかける



イラスト ゆきむら提供

# 合祀祭と供進社

## 明治の合祀祭

内務省神社局の指導のもと、明治39年(1906年)から43年(1910年)にかけて神社合祀が行われました。これにより、府県社以下の神社は約19万社から13万社へと整理されました。法令により、神社には必ず神職を置くこと、また基本財産を積み立てることが条件とされました。この大規模な整理によって管理が強化された神社は、一般の宗教施設とは区別され、国家祭祀の威厳を保持するものとされました。一方で、整理の対象となつた神社の多くは地域に密着した小規模な神社であつたため、合祀令の是非をめぐつて全国各地で激しい議論が巻き起こりました。

天皇を主祭神とする八幡神社、そして谷戸に鎮座し猿田彦命を主祭神とする熊野神社です。この合祀は、単に神社を一所にまとめるという制度上の出来事にとどまらず、当時の田無町において、地域の結びつきや町の一体感をあらためて形にする重要な機会でした。

以下にご紹介するのは、その合祀祭の様子を詳しく伝えた当時の記事です。記事からは、各神社から神輿で御神体を遷し、田無神社へと厳かにお迎えするまでの道のりや、当日の祭典の雰囲気、さらには町を挙げてこの出来事を祝つた人々の熱気が、生き生きと伝わってきます。沿道に集まつた多くの人々、国旗を掲げて祝意を表した町の様子や賑わいなどからも、この祭事が当時の田無町にとつていかに大きな出来事であつたかを知ることができます。

※参考として  
下向台に鎮座する八坂神社(田無町下向台71番地)、上向台に鎮座する八幡神社(田無町上向台1172番地)、北芝久保に鎮座する稲荷神社(田無町北芝久保2233番地)は官有地であり、上宿に鎮座する八幡神社(田無町上宿1720番地)、谷戸に鎮座する熊野神社(田無町谷戸2898番地)は民有地でした。

東京府神職會公報 第三十一号  
明治四十四年一月二十五日発行  
彙報 田無町の合祀祭

北多摩郡田無町にては客月十二日合祀祭典を舉行せり、從來此の町には村社田無神社の外無格社五社ありて各字に散在せしが該無格社は何れも微々たるものにて社殿の設備完全なるものなく年々の祭祀も碌々行はれず神威を汚瀆せんことを恐れ有志の士は夙に村社に合祀の念慮ありしも餘り急速に強行せんには却て崇敬者の感情を害し町内の圓滿を欠くの虞ありとなし今日まで荏苒経過せしが最早機運熟せりと觀たる町長初め名譽職員社掌有志は相謀り相語らひて東西走盡瘁せられし結果圓滿に其の議成り本年十月中其筋へ合祀の事を申請せしに十一月一日と二日

とに五社とも田無神社へ合祀の許可を得たるを以て今回該祭典を執行する事となりぬ

今其概況を記さんに前日より社掌始め神職数名は準備に怠りなく新調の神輿を各被合祀神社崇敬者總代に渡すべく準備し翌日の祭典を待てり當日は天氣晴朗一點の織雲なく未明より天に轟く煙花は暁の眠を醒し殆と耳を聳せん計りなりき午前十時定刻来るや祭員一同賀陽社掌宅に集合し部署を定め各被合祀神社へ祭員を二名宛崇敬者總代の案内により、號砲を合圖に出發せり各社は田無神社を中心として東西南北へ約十八町余隔り居れり尤字上宿なる八幡神社は最近く十二町程なれば此處を五社の集合所と定め假宮を設計齋主賀陽社掌は其の附近なる濱野氏子總代宅にて待受けたり是より先來賓は濱野氏宅を休憩所となしありしゆへ本多郡社主任書記所田無分署長下田郡參事會員浦野町長淺川小學校長其他名譽職員參集し各社神輿の渡御を待受られたり午後二時半各神輿を假宮に安置し奉り祭員俗人一同濱野氏宅にて暫時休憩し先着者と共に出發せり、違中威儀堂々最莊嚴肅に田無神社へ着御次第書の如く祭典を執行せり式を了せるは午後四時少し過ぎなりし

夫れより町役場に於て各来賓祭員  
伶人等に鄭重なる饗應ありたり此  
の未曾有の祭事を拝せんと参集せ  
る老若男女幾千人なるを知らず十  
數町の長き廣き道路の兩側に堵列  
し殆ど立錐の地なき程なりきさて  
當日の餘興としては未明より煙火  
を打揚げ又花車一臺を練出し其の  
囃子の音高く低く氣遣の音頭と相  
和し其勇ましき言ん方なかりき町  
内は各戸國旗球燈を掲揚し以て祝  
意を表せり、惟ふに此神社の合祀  
たるや其整理上必要の事にてやが  
て神社の威嚴を高むる所以なり當  
町は七百戸餘あれども是にて一の  
田無神社となりたれば自然と此町  
の繁榮の基ともなり又圓滿に共同  
一致の實を表現したる者なれば實  
に慶賀すべき現象にして滿腔の熟  
誠を以て祝する所なり神社整理上  
の理想とせる一町村一社となれる  
は本郡に於て嗚矢なれば大に特筆  
すへき價值ありと信し◇の一斑を  
報するになん因に當日参加せる祭  
員は賀陽社掌の外武藏野村窪田、  
田邊、小金井村宮本、星野、梶、  
保谷村加藤、久留米村、栗原星野  
小平村宮崎、千歳村池龜の十一名  
なり、  
村社田無神社へ合祀せし神社名左  
の如し  
無格社 八幡神社 同 八坂神社

- 同 稻荷神社
- 同 熊野神社 同 八幡神社
- 祭式次第左の如し
- 被合祀神社動座祭式次第
- 第一號報正午十二時
- 先時刻齋主以下祓場二着ク
- 次修祓式ヲ行フ
- 次齋主開扉復席ス
- 次神饌ヲ供ス
- 次齋主祝詞ヲ奏ス（此間祭官参列者一同平伏）
- 次齋主祭員拜禮
- 次崇敬者總代玉串ヲ奉り拜禮
- 次神饌ヲ撤ス
- 次齋主御正體ヲ神輿二遷シ奉ル
- 次渡御各自行列二着ク
- 第二號報午後二時出發
- 御正殿 合祀祭式次第
- 先齋主祭員各設ノ席二着ク
- 参列員着席（此際祓主修祓ヲ爲ス）
- 次齋主開扉（此際奏樂）
- 齋主各御神寶ヲ御正殿へ奉遷ス（此間奏樂）
- 次神饌ヲ供ス（此間奏樂）
- 次齋主祝詞ヲ奏ス（此間一同平伏）
- 次郡長以下玉串ヲ奉り拜禮
- 次氏子總代玉串ヲ奉り拜禮
- 次齋主玉串ヲ奉り拜禮祭員一同列拜
- 次神饌ヲ撤ス
- 次閉扉
- 次各自退去
- 以上（窪田生報）

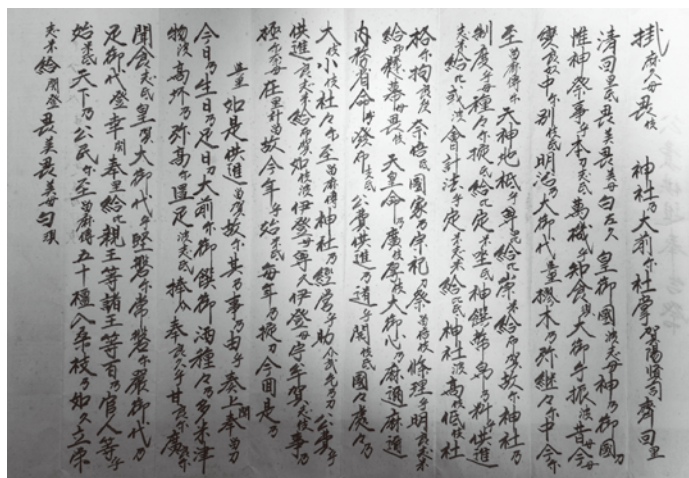
公費供進について

神饌幣帛料供進社の制度は、地域の神社信仰を支える仕組みであると同時に、国家による神社制度再編の一環として理解する必要があり。田無神社は戦前、村社の資格を有し、神饌幣帛料供進社に指定されることで、財政面において一部、国家の保護を受けていた。

や村社に属する神社の中から指定されましたが、郷社・村社のすべてが神饌幣帛料供進社となったわけではありませんでした。その後、昭和20年（1945年）の神道指令により、神社は国家による保護や監督の体系から切り離され、宗教法人として独立した存在へと再編されました。その結果、神饌幣帛料の供進も廃止されることとなりました。

神饌幣帛料供進社とは、明治期から戦後にかけて、神饌幣帛料の供進を受けていた神社を指します。ここでは、祭祀に際して神前に供えられる供物や幣帛に関わる費用を意味しており、近代日本における神社行政の中で制度的に位置づけられています。

明治初期に整備された近代社格制度は、神社の格式を段階的に定めた制度です。神饌幣帛料供進社は、主としてこの近代社格制度における郷社



公費供進奉告祝詞

シリーズ

「尉殿考」第五回

尉殿の神格を特定し、その由来を理解しようとする試みは、明治初期の初代社掌(宮司)の賀陽濟、二代目社掌の賀陽尚賢の時代から続いてきました。筆者も可能な限り調査を重ねておりますが、現時点では決定的な資料の発見には至っていません。尉殿権現については、今後、論文等による学術的な研究の蓄積によって、さらに解明が進むことを期待しています。

令和4年(2022年)に刊行した御遷座三五〇年記念誌『写真と資料から見る田無神社』では、尉殿についてのさまざまな説・解釈を紹介し、垂迹神である俱利伽羅不動明王は雨をもたらす水の守護神、シナツヒコノミコト・シナトベノミコトは風雨の調和と五穀豊穰を司る神であることから、尉殿は水の神であると整理しました。その際、紙幅の都合により記載できなかった説・解釈については、社報において、「尉殿考」として紹介しています。

第1回では、昭和38年(1963年)に大國魂神社が刊行した『武

蔵府中物語』の尉殿の記述を紹介しました。第2回では、昭和59年(1984年)に保谷市役所が刊行した『保谷市史別冊二保谷の石仏と石塔』における尉殿の記述を取り上げました。第3回では、平成18年(2006年)に刊行された片桐讓著『神と仏と村落共同体——宗教社会史の視座から——』を紹介しました。第4回では、昭和61年(1986年)に埼玉県神社庁が刊行した『埼玉の神社入門・北埼玉・秩父』を紹介しました。

今回は平成3年(1991年)に埼玉県郷土文化会より刊行された『埼玉史談』第38巻第2号に収録された、神山健吉氏の論考「ジュウドノ」考(下)を紹介し、本論考は、「ジュウドノ」という語や信仰のあり方について、地域史・民俗史の観点から検討を加えたものであり、白山信仰と十一面観音との間に、ジュウドノに関わる共通性を見いだしています。とりわけ著者が注目するのは、十一面観音が本地仏として位置づけられている点です。著者は、この事実をふまえ、十一面観音が白山において水分神として祀られていることとの関連を重視し、ジュウドノ社の古い段階における祭神との結びつきを考察し、水神信仰、十

一面観音信仰、白山信仰が重なり合う歴史的・民俗的文脈の中で理解しようとするものといえます。※埼玉県を中心に、尉殿は「ジュウドノ」「ジュウドノ」「ブードノ」など、さまざまな呼称で伝えられ

ところで、ここで一つ注目すべき事実がある。それは戸田市大野の氏神であった重殿権現社が本地仏として十一面観音を安じていたことであり、また、小川町能増の重殿にある八宮神社も同じく十一面観音を本地仏としていたことである。更に、田無神社が所蔵する明治二十五年に書写された田無村尉殿権現社の縁起書にも、この神社が十一面観音を本地仏としていたことが記されている。十一面観音が白山で水分の神として祀られていることに思いを致せば、この観音がジュウドノ社の最も古い時期の祭神であった可能性は十二分に考えられるところである。また、水分の神だからこそ、各地で水神として祀られることが多いということにもなる。従って、今日各種の文字を宛てているジュウドノの原型は水殿ではないかと思われる。

ています。田無神社では尉殿が江戸時代以前から「ジュウドノ」と呼ばれ、水分の神として祀られていました。

なお、十一面観音が白山で水分の神として祀られていることから、十一面観音と白山信仰とがまた深く関わってくる。大宮市染谷の重殿権現社の祠に、「重殿大権現」の木札が「白山妙理大権現」と共にご神体代わりに併祀されているのは、両者の関係を知る上で極めて暗示的である。高麗川と都幾川の合流地点の坂戸市赤尾のズウドンには白山社があるし、保谷市の尉殿神社の前身、尉殿権現社が正保4年(1647年)まで鎮座していた谷戸付近の古くからの住民が信仰していたのは白山だと言う古老の話にも、白山信仰とジュウドノとの密接な関係を窺い知ることができるのである。神山健吉(1991年)『ジュウドノ』考(下)、『埼玉史談』第38巻第2号所収 p20-21

写真でめぐる  
田無神社の記録

長年にわたり大切に所蔵・保存されてきた写真を、社報で紹介しています。今回は、御遷座三五〇年記念誌『写真と資料から見る田無神社』において、紙幅の都合により掲載できなかった写真7点をご紹介します。また、昨年末より、田無神社公式HPでも明治・大正・昭和期の境内や祭礼の様子を順次ご紹介しておりますので、あわせてご覧ください。



昭和42年(1967年) 社殿前



昭和40年頃 祭囃子



年代不明 夏の子供神輿



自衛隊が大砲の信管の調査



年代不明 天王祭でぼうち



年代不明 お祭りの山車



谷戸商店街 子供神輿

シリーズ「神社と戦争」

第7回 日清戦争

令和4年(2022年)に刊行された御遷座三五〇年記念誌『写真と資料から見る田無神社』は、田無神社の長い歴史を、貴重な写真や資料を通して振り返る構成となっております。なかでも第8章「神社と戦争」では、田無神社と戦争との関わりについて、当時の祝詞や関連資料を紹介しています。

本社報では、御遷座三五〇年記念誌『写真と資料から見る田無神社』に掲載された資料や、記念誌刊行後の倉庫調査によって新たに発見された資料を紹介いたします。また、終戦の日に当たる令和7年(2025年)8月15日に、田無神社が保管してきた戦争に関する歴史資料を「神社と戦争」としてWeb上で公開いたしました。これは、戦争の悲惨さと地域の歴史を、未来を担う世代に伝えていくことを目的とした取り組みです。戦争がもたらした悲しみや苦しみに向き合いながら、祈りを捧げ続けた人々の姿を今に伝えることは、平和の大切さを見つめ直すきっかけとなるはずです。田無神社が果

たしてきた役割、そして当時の人々の思いに、心を寄せていただきましたら幸いです。

日清戦争は、明治27年(1894年)から明治28年(1895年)にかけて、日本と清国との間で行われた戦争です。戦争は日本の勝利によって終結し、明治28年(1895年)4月には下関条約が結ばれました。これにより、清国は台湾や澎湖諸島を日本に割譲し、あわせて賠償金を支払うこととなりました。日清戦争は、日本にとって近代以降初めての大規模な対外戦争であり、その後の対外政策や軍備の拡張、国内の社会意識にも大きな影響を与えました。

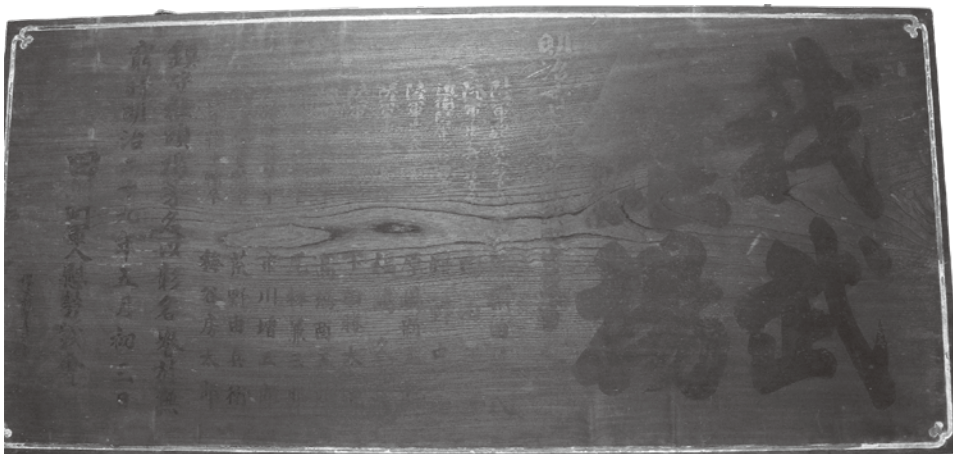
講和条約で獲得した遼東半島は、ロシア・ドイツ・フランスによる三国干渉によって返還を迫られ、日本は欧米列強の力を痛感します。この経験は、日本国内に「臥薪嘗胆」の意識を広め、富国強兵や軍備拡張をさらに進める契機となりました。また、朝鮮半島や満洲をめぐる利害対立が深まり、日本は大陸への関与を強めていきます。

日清戦争は、日本が列強の一員を目指し、東アジアの国際秩序へ本格的に進出していく大きな転換点となりました。

わがふこれあがりて  
我武維揚の額

この板碑には、田無町から日清戦争に出征した10名の名前が記されています。田無村からは戦死者は出なかつたとされています。

「我武維揚」は、五経の一つである『書経』の「泰誓中」に典拠を有し、威厳に満ち、奮起して向上していく様を指す語です。明治15年(1882年)、明治天皇が軍人に下賜した「陸海軍軍人に賜はりたる勅諭(軍人勅諭)」においても、「我武維揚りて其榮を耀さば朕汝等と其譽を偕にすべし」と記されており、当時の軍人・兵士にとって馴染み深い言葉でありました。



台湾澎湖島帰還額

「澎湖の瘴風臺島乃陣、百万死に一生を得たるを感謝す  
陸軍歩兵 福島久蔵

明治三十一年二月出陣 記念日

田無神社拝殿には、台湾・澎湖島からの帰還を記念する額が掲げられており、そこには上記のような文言が記されています。「瘴風臺」という表現は、「瘴」が熱気や悪疫の立ちこめる土地を意味することから、当時流行したコレラなどの感染症を指している可能性が考えられます。

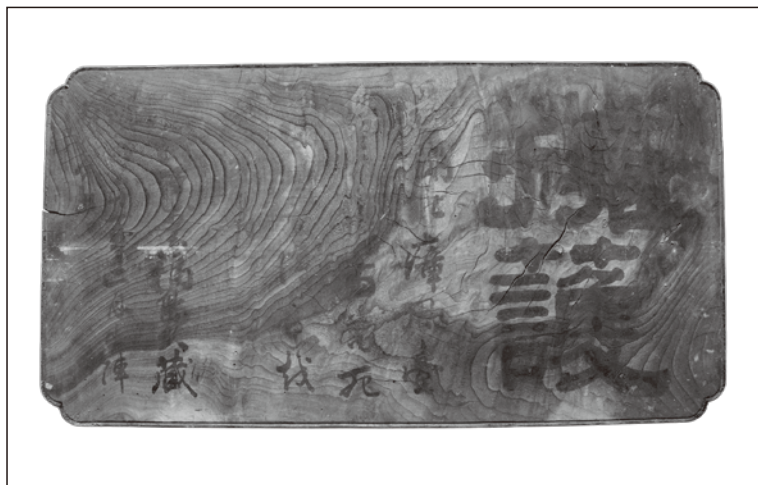
明治28年（1895年）

3月23日、日本陸軍は台湾本島の西方約50キロメートルに位置する澎湖島に上陸しました。しかし、この戦いでは軍内部にコレラが広がり、多くの死者を出したことが知られています。澎湖島での戦いにおいては、千人を超える将兵が命を落とすとされ、過酷な戦地であったことがうかがえます。

一方で、この額には「明治31年（1898年）二

月出陣」と記されていますが、澎湖島の戦いそのものは明治28年（1895年）の出来事です。この年代のずれについては詳細が明らかではありませんが、澎湖島に

関わるその後の軍務や戦役を指している可能性も考えられます。明治30年（1897年）11月1日に



は台湾総督府官制が施行され、日本による台湾統治の制度が整えられました。以後、およそ50年にわたり、日本の統治が続くこととなります。

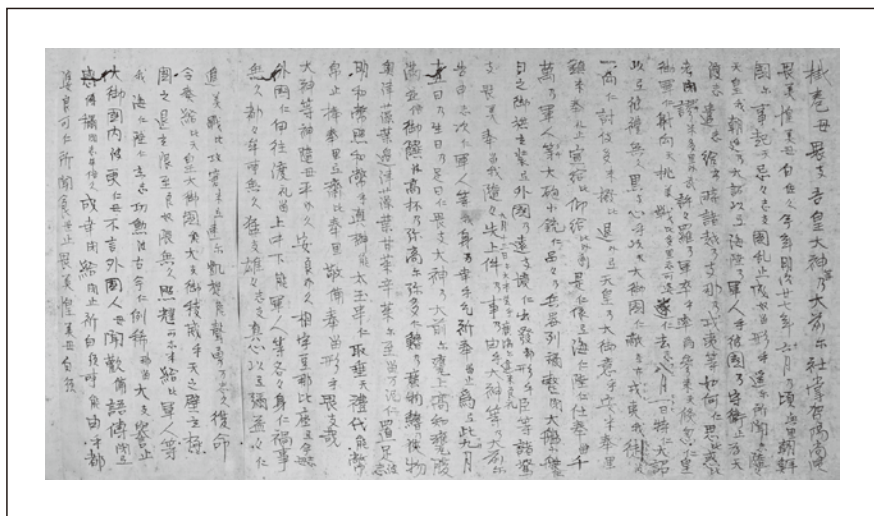
大本営広島移転奉告祝詞

この祝詞は、日清戦争中、大本営が宮中から広島城内に移転したことを奉告するものです。

兵站の要衝である広島には、明治27年（1894年）9月13日に大本営が移転し、その2日後の9月15日に明治天皇が移御されました。祝詞の記述によれば、祭儀は9月15日に齋行されたことあり、明治天皇の移御と同日に齋行されたことがわかります。

なお、文中にある「今年明治廿七年六月乃頃與里朝鮮国尔事起天」とは、日清戦争開戦の契機となった甲午農民戦争に端を発する朝鮮半島の混乱を指しています。

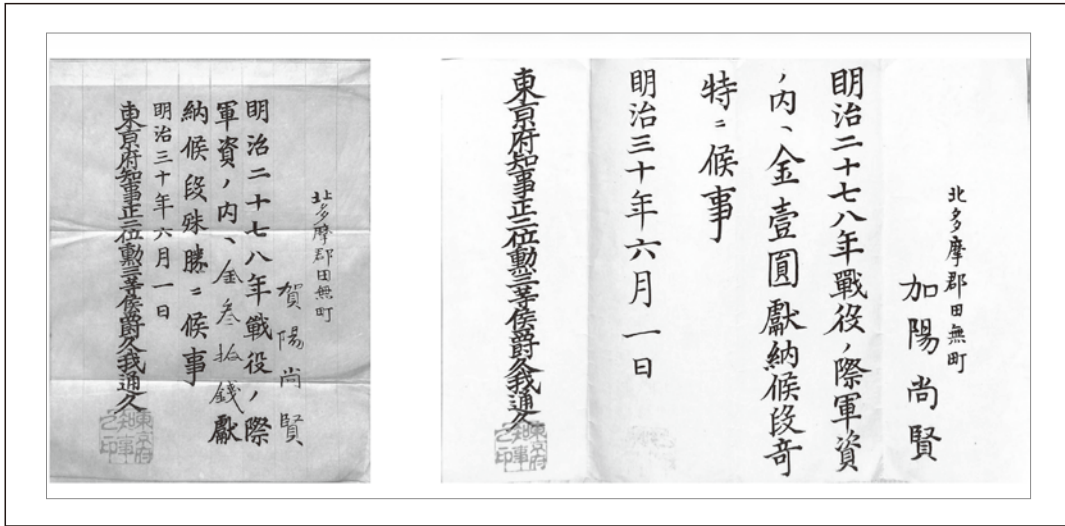
なお、出兵した福島久蔵については、田無神社拝殿に掛かる「我武維揚」の額にその名は見えず、この点もあわせて興味深いところ



## 献納褒状

これらは、日清戦争の軍資金への献金に対する褒状です。当時の田無神社社掌であった賀陽尚賢が、それぞれ1円と30銭を寄付したことが分かれます。これらの褒状はいずれも、明治30年（1897年）6月1日付で賞勲局から交付されたものです。

当時の日本は、近代国家としての財政基盤を整えつつありましたが、大規模な対外戦争を行うには通常の税収だけでは不十分でした。そのため、国民から資金を集める形で国債を発行し、軍備や兵士の輸送、戦地での諸経費などに充てました。



## 一の鳥居

一の鳥居は、氏子らの奉納により、明治28年（1895）11月に建立されました。この年は日清戦争の終結にあたり、講和条約の調印や三国干渉など、外交・軍事上の大きな画期となった年です。そのため、建立の時期からみて、この鳥居奉納は戦争終結後の社会的高揚の中で行われた可能性があり、一の鳥居も、日清戦争後の時勢と関わる奉納であったと考えることができます。

加えて、この時期は大日本帝国憲法発布後、産業や教育の整備が進み、神社が地域の中心として再編・整備されていく時代でもありました。

写真には、一の鳥居の基壇の工事が行われ、鳥居にはシミのような痕跡が認められます。青梅街道には車が走り、その奥には商店が見えます。また、手前には木製の由緒書看板と巴紋の提灯が見られます。



こちらの写真は、浜中のりかた氏のご自宅に納められているもので、昭和15年（1940年）に撮影されたものと考えられます。この年の11月に、皇紀2600年を記念して田無神社の社号碑が建立されました。

社号碑の揮毫は、戦前に陸軍大臣、陸軍大将、文部大臣などを歴任した荒木貞夫によるものです。荒木は戦後、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）によりA級戦犯として起訴され、終身禁固刑に処せられました。



こちらの写真も、浜中のりかた氏のご自宅に納められているものです。現在、一の鳥居は青梅街道から境内に5メートルほど入った場所に建っていますが、この写真に写る鳥居の位置は、現在の一の鳥居が建つ場所とは異なっているように見受けられます。また、二の鳥居は昭和57年（1982年）に建立され、東日本大震災の際に倒壊しているため、時代的に見ても、この写真の鳥居とは一致しません。

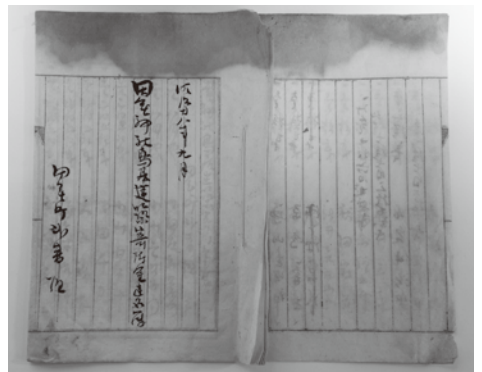
この鳥居に関する正式な記録は残されていません。そのため、この写真が田無神社で撮影されたものかどうかを確定することはできませんが、鳥居建立の記念として撮影された写真でしょう。



こちらは、一の鳥居の寄進芳名簿です。田無町二番組に属する120名の寄進者のお名前が記されています。

**日清戦争第二軍凱旋碑**

西東京市住吉町鎮座の「尉殿神社」拝殿向かって右手奥には、「日清戦争第二軍凱旋碑」があります。この碑は明治33年（1900年）に建立されたもので、碑に記され



表面

た9名は、いずれも上保谷村（尉殿神社氏子区域）の出身者です。9名は日清戦争に従軍し、全員が無事に帰還しました。

碑の表面には、従軍した9名が清国において約10か月にわたりたどった事績が、漢文で記されています。また、碑文の書は重野安繹氏によるものです。

重野安繹氏は、薩摩藩出身の漢学者・歴史学者です。江戸で学問を修めたのち薩摩藩に仕え、明治維新後は政府の修史事業に参加しました。のちに東京帝国大学教授となり、史料に基づいて歴史を検証する実証的な研究姿勢を重んじました。その厳格な姿勢から「抹殺博士」とも呼ばれましたが、日本における近代歴史学の成立に大きな影響を与えた人物です。

以下、碑文に記された事績を現代語訳し要約して紹介します。

「明治27年9月28日に広島へ到着し、10月には盛京省花園口に上陸しました。11月には金州・大泊村・旅順口で戦い、12月には斬家屯に陣して水師營の砲台を守りました。翌明治28年1月には、山東省温泉湯付近で戦い、2月に旅順へ戻りました。その後、5月に講和条約が結ばれたのち字品へ帰還し、6月10日に東京へ凱旋しました。」

## 第二軍凱旋碑

征清之役武藏北足立郡保谷村人九名  
 屬第二軍明治廿七年九月廿八日叡  
 京抵廣島十月由宇品港航清國抵盛京  
 省花園口十一月戰於金州於大泊村於  
 旅順口十二月陣於斬家屯守水師營  
 臺廿八年一月駕艦抵榮白灣戰於山東  
 省温泉湯旁近二月戰於威海衛北山礮  
 臺旁近是月還旅順五月媾和條約成歷  
 金州大連灣還宇品六月十日外線東京  
 自發京至此閱十月和寒暑兩手脚皸  
 日夜無休彈丸雨注之下奮迅激勵以敵  
 王愾耀國威海外及凱旋錄功受賞古  
 謂邦家之光豈獨閭里之榮者於是有志  
 者相議建碑於本村鎮守祠域內錄其姓  
 名使後人有所觀感興起而余作之文  
 勅選議員文科大學教授正四位勳  
 三等文學博士重野安繹撰并書

日清戦争第二軍凱旋碑碑文(表面) 明治33年(1900年)建立

重野安繹氏による撰文と揮毫

日清戦争における陸軍第2軍は、戦場を朝鮮半島から清国本土方面へ広げていく中で、重要な役割を担った部隊です。

明治27年(1894年)に日清戦争が開戦すると、日本軍はまず朝鮮半島において清国軍と戦い、平壤の戦いなどで勝利を収めました。その後、戦局は朝鮮半島にとどまらず、遼東半島、さらに山東半島方面へと拡大していきます。この大陸方面での作戦を進めるため、大山巖を司令官として編成されたのが陸軍第2軍でした。

第2軍に与えられた任務は、遼東半島に上陸し、清国北洋艦隊の根拠地であった旅順口を攻略することでした。旅順口は、渤海湾の入口に位置する軍事上の要地であり、清国海軍にとって極めて重要な拠点でした。そのため、旅順口を押さえることは、戦争全体を日本側に有利に進めるうえで大きな意味を持っていました。

明治27年10月、第2軍は盛京省の花園口付近に上陸しました。その後、金州、大連湾方面へ進み、旅順口を目指して進軍します。日本軍は陸上から旅順要塞に迫り、同年11月には旅順口を攻略しました。

さらに第2軍は、山東半島方面

の作戦にも関わりました。中でも威海衛方面への進攻は、北洋艦隊を無力化するうえで重要な作戦でした。威海衛方面で清国海軍に大きな打撃を与えたことにより、清国は講和へと向かわざるを得ない状況に追い込まれていきました。

なお、第2軍司令官であった大山巖は、日清戦争後も明治日本の軍事史において重要な位置を占めた人物です。のちの日露戦争でも大きな役割を果たしました。田無神社には、日露戦争の戦勝を記念して明治40年(1907年)に建立された日露戦役記念碑があり、その碑文の文字は大山巖の揮毫によるものです。

日清戦争第二軍凱旋碑の裏面には、「寄付連名」として100名以上の人々の名前が刻まれています。また、石工は田無町の谷合廣吉が担当しました。



裏面

# 戦争を越えて田無を語る

## 第二回 鶴田實さんの記憶からたどる

社報44号において田無神社宮世

話人の下田信助さんに戦時中のお話をうかがいました。本号では、

鶴田實さんにお話をうかがいます。

鶴田實さんは昭和11年（1936）

7月28日生まれ。幼少期を田無の南町で過ごし、終戦を9歳で

迎えられました。現在は、株式会社鶴田工務店の取締役会長を務めておられます。今回うかがった証言には、空襲、出征兵士の見送り、そして終戦後に現れた米兵の姿など、戦争が地域の暮らしの中に深く入り込んでいた実情が語られています。

本稿では、鶴田さんの証言をできるだけ活かしつつ、参考記事を加え、地域史資料として読める形に整理しました。なお、兵器名や出来事の理解には、鶴田さんが後年得た知識にもとづく推測を含む部分があります。

一 庭の木に引つかかったもの

〔鶴田さんの証言〕

「6歳の時のことです。今から84年前くらいになるのではないかと思います。自宅の庭にある木に、大きな気球のようなものが引つかかりました。大きさは8畳間1つ分くらいあったように思います。風船のようなもので、下に箱が付いていました。すぐに田無警察署に届けましたが、お巡りさんもそれが何なのか分からなかつたようでした。そのあと憲兵隊が来て、その気球のようなものを持っていきましました。当時は、お巡りさんより兵隊の方が偉かったです。子どもの頃は、それが何なのか分かりませんでした。今から考えると、日本からアメリカに向かつて吹く偏西風に乗せて放たれた風船爆弾の試作機のようなものだったのではないかと思います。」

この物体が実際に何であったかは、この証言だけで断定することはできません。しかし、警察ではなく憲兵隊が回収していったという記憶は、当時の社会において軍が強い権限を持っていたことをよく伝えていきます。

注1 風船爆弾  
太平洋戦争末期、日本軍は偏西風を利用してアメリカ本土に到達させることを目的に、気球型の爆弾を放ちました。一般に「風船爆弾」と呼ばれます。本証言に出てくる物体がそれに関係するかは未確定です。

二 買い出しの人々

〔鶴田さんの証言〕

「都内から西武鉄道に乗って、田無まで買い出しに来る女性たちがいました。麦のおしわりやジャガイモ、さつまいもを買いに来る人もいましたし、物々交換のために、農家を持つていない服や着物、靴などを持つて来る人もいました。リュックを背負って買いに来る女性の中には、お化粧をしている人もいました。赤坂あたりから買いに来る人もいましたし、『子どもがいるので、どうしても食べ物を分けてください』という人もいました。農家ではニワトリを飼っていたので、卵や鶏肉を食べることができましたが、野良犬を食べる

こともありました。兵隊さんが『赤い毛の犬はおいしい』と言っていたのも覚えていきます。また、西武鉄道では、東京都内で集められたし尿を運んでいました。これは、農村で肥料として使うためでもあり、都市の衛生対策にもなる仕組みでした。私たちもリアカーを引いて田無駅まで行き、し尿をもらってきたものです。荻窪や吉祥寺あたりに住んでいる人は、お金持ちで白い米を食べていて栄養があると知られていたもので、そういう人たちのし尿は直接もらいに行くこともありました。それを「金糞」と呼んでいました。陸稲にはよい肥料になったので、畑にまいていました。ただ、日中になって乾いてくると、においを含んだ風が吹くこともありましたし、混ざっていた新聞紙などが飛んでいくこともありました。」

参考図書 保谷市史編さん委員会（1989年）『保谷市史通史編3 近現代』p.385-386

昭和19年に入ると食料不足の度合いもより高くなり、それを反映して東京では野良犬が横行したと言われている。燃料節約とトラック不足から、武蔵野鉄道・西武鉄道で夜間に、沿線農園向けのし尿

電車輸送を開始したのもこの年の11月のことであった。食料増産の担い手として当局が採用したのが「戦時農業要員」制であり。戦時農業要員とは農業生産統制令に基づくもので「国民食料確保の国家要請に応え、全力を発揮して食料農産物の増産を図るべき」ものであり、疾病や軍事招集などのほかは自由に「農業を営むことを罷める」ことはできないことになっていった。こうしたいわば農業戦士や女子や青少年達にも及び、食料増産が図られたのであるが、人手不足に加え肥料・農具などの生産手段の供給もままならず、集約農業を基本とする農業生産は減反の一端をたどることになる。

### 三 撃ち落とされた戦闘機

#### 〔鶴田さんの証言〕

「関前公園の西側に関前高射砲隊の陣地がありました。高射砲がP51マスタングに当たって、戦闘機を落とすことができました。米兵はパラシュートで付近に降りてきましたが、ピストルを構えていました。ピストルは撃たなかつたようです。大勢の人たちが『こんちくしょう』と言いながら、竹槍や鎌、ナタを持って集まっていたのを覚えています。子供はみ

てはダメだと言われて、近づくことはできませんでした。昼夜間わず探照灯を当てていたもので、パイロットの顔が見えることもありました。小平の小川の方にB29が落ちたこともあり、それを見に行つたことがあります。現場にはケヤキの木に洋服が引っかかっていたり、女性用のものと思われる品が散乱していました。その時、女性の兵隊も乗っていたのではないかと感じました。」

#### 参考図書 前川正男(2000年)

##### 『中島飛行機物語』 p178

はるばるサイパンから飛んでくるB29は、ひときわ目立つ富士山を目標に飛来してきて、富士山の手前で日本の迎撃戦闘機群を避けるため一万メートルまで上昇する。そして、中央線に沿って東上し、三鷹上空で武蔵製作所へほとんど全弾を投下し、すぐそばの荻窪製作所へは残弾を落とし、日本の戦闘機と交戦しながら九十九里浜から日本を離脱、サイパンへ帰るのがコースであった。

武蔵製作所の上空の雲が厚い時B29は、レーダーを頼りに宮城へ向けて投弾した。あいにくその弾がそれで神田の一带に落ち、神田っ子はびっくりした。なにしろ中

島飛行機破壊がB29の当初の目的であったから、搭載しているのはほとんどが爆弾であったため破裂音はべらぼうに大きく、その1トン爆弾の威力は凄まじかった。

### 四 並んだドラム缶

#### 〔鶴田さんの証言〕

「武蔵野女子学院の周りには、兵隊がドラム缶をたくさん並べて置いていました。その中にはコールトールが入っていて、どろどろしていました。空襲があると、それを火を付け燻して黒い煙を出すんです。そうすると飛行機から下が見えにくくなる。煙はもうもうと立ち上がり、終わりのサイレンが鳴るとすぐに消すんです。中島飛行機の工場あたりを隠す役割があったのではないかと思います。今の田無工科高等学校や柳沢小学校あたりには時限爆弾がたくさん落ちたと思います。爆弾が落ちると、深い穴ができて、そこから水が出てくることもあります。柳沢のガスタンクあたりに爆弾が落ちて、青梅街道が水浸しになったこともあり、女の子を助けに行ったことがあります。深大寺街道辺りでも水が出ました。昭和20年に清瀬の親戚の家に疎開した際には、田無の方を見ると煙が上がってい

るのがよく見えました。女性たちは飯能方面、名栗方面へ2ヶ月くらい疎開しました。」

参考図書 武蔵野女子学院中学校・高等学校松岡千里(2010年)『戦時日誌類からみた戦時下の武蔵野女子学院』 p16

日本本土への空襲が激しくなると、軍部は学校や寺院などを応急的に兵舎(学校兵舎)とし始めた。学院の施設自体も次第に戦時色を増し、1944年(昭和19年)3月には「東京都立武蔵野女子学院託児所」が旧弓道場内に開設され、同年11月には校舎の一部に、本土防衛の高射砲隊東部1991部隊が入り、同年12月末には、軍の命令により、空襲を避けるため校舎全体に迷彩が施された。塗料が手に入らず、コールトールを使って白い講堂は黒く塗られた。このときの日誌には「校舎表面泥土塗抹作業に兵隊朝より従事。白垂の殿堂も惜しい哉、姿を消さんとす」と記され、無念さが滲み出ている。さらに1945年(昭和20年)6月には校舎の一部を燕部隊に提供(正門に営門が設置された)、校庭の至るところに防空壕が作られ、構内は軍服姿ばかりが目立つようになる。

## 五 物置の兵隊たち

〔鶴田さんの証言〕

「自宅の物置には、10人以上の兵隊が常駐していました。広さは40畳くらいあったと思います。兵隊は剣をぶら下げていましたし、お風呂も持ち込んでいました。自宅の薪を使って自炊していました。仮住まいであって、夜が明けると中島飛行機の工場の方へ向かって出かけて行ったと思います。また、今の市役所の南側あたりには、戦車壕があつて、たくさんの戦車がありました。斜面を掘り下げて、溝の中に戦車が隠してありました。石神井川沿いだつたと思います。」

## 六 竹藪の防空壕

〔鶴田さんの証言〕

「屋敷に竹藪があつて、そこに防空壕がありました。防空壕は自宅に二つありました。家族が絶えてしまわないように、二つに分かれて隠れるためです。夜に照明弾が落ちた時は、昼と同じくらい明るくなって、竹藪の葉っぱが数えられるくらいでした。当時3歳から4歳くらいだった弟が、防空壕から出てしまったことがありました。その時、戦闘機が急降下してきて、機関銃で撃つてきました。あと1メートルで当たってしまう

ところだつたと思います。その機関銃の弾を、スコップで拾って防火用水に入れたのを覚えていますが、機関銃の弾は、大人の指くらいの大きさで、弾から湯気のようなものが出ていました。」

参考図書 田無市立中央図書館  
〔1982年〕『田無の戦災誌』p93-94

今井 ラジオのニュースでは「田無上空」

とか、しよつちゅう「田無」という言葉が使われてたから、あの頃の田無は有名でしたよ。中島飛行機を初めて小さい工場がたくさんあるため、狙われたんです。」

小林 中島飛行機武蔵製作所が焼夷弾爆撃を受けた時、武蔵境の中島の住宅の人が次々工場から逃れて自宅へ帰るのに出くわしました。その中に一人身体中血だらけで目も鼻も耳も崩れ落ち、指も何本かない人が、精一杯逃げていくのを見た時はガタガタ体が震えました。その時うちのおじいさんが「これはカチカチ山の戦といっしょだ。もうじき、カチカチ負けるぞ」と言っていたのを覚えています。

内田 あその工場はメチャクチャにやられたものねえ。かなりの人が亡くなったんでしょ。重ねた棺桶の死体からダクダク滴が落ちたつていうもの。それをトラッ

クで火葬場へ持って行っても燃料がなくて焼けないんだつてよ。むごい話でしょう。

## 七 出征兵士の見送り

〔鶴田さんの証言〕

「小学校の黒板には、だれが出征するか書かれています。日の丸の旗を持って田無駅まで見送りに行き、駅で万歳することもありました。出征する兵隊は、剣を下げて行進し、田無神社にお参りに行っていました。小学校では、空襲が始まると校舎の南側にある防空壕に入りました。奉安殿があつて教育勅語を暗記していました。農家の子供は成績が良かったんです。それは、農家の子供は先生に表を持って行ったり、逆に先生が農家の子供に食べ物やねだつたからなんです。」

## 八 GHQ

〔鶴田さんの証言〕

「玉音放送が行われることを知らせる回覧板が回ってきました。また、8月16日には、P51マスターングが高圧線すれすれの低空を、編隊を組んでゆつくりと飛んでいました。田無の上空にはB29が何機も飛来し、すさまじい爆音が響いていました。終戦になると、チ

ューイングガムを噛んでいる米兵が、機関銃を持ってジープに乗って、自宅のさつまいも畑や、陸稲の畑に勝手に入ってきました。日本兵が残っていないか探していたようです。一人は黒人でした。弟と近寄つたら、食べかけのチョコレートを一人一枚くれたのを覚えています。父には、GHQに連れて行かれるからだめだと言われました。戦車も道路を走っていました。戦車も道路を走っていました。音がうるさかったのを覚えています。米軍の将校が、近所にあつた3階建ての中島飛行機の宿舎に住んでいました。また、上級将校になると、成蹊大学の南側、五日市街道に入ったあたりに住んでいたようです。現在の三鷹市・横河電機の近くには、赤線があつたともいわれています。赤線が終わると、中島飛行機の工場のあたりには、米軍が入りくるダンスホールみたいなものがあったのを覚えています。田無駅北口には米軍相手のキャバレーがいくつかできたようです。国に帰る米兵は生活用品を置いて帰るので、田無駅周辺では、米兵から横流しされた古着や、たんす、椅子などを売る人もいました。」

## 神社からのお知らせ

### 津嶋神社祭礼

宵宮の7月11日(土) 午後6時より柳沢集会所に鎮座する津嶋神社において、宵宮祭・出御祭が斎行されます。続いて、御旅所にて入御祭・動座祭が執り行われます。そして本宮の7月12日(日)は、柳沢ガード下付近で発輿祭・神幸祭が斎行され、津嶋神輿が出御いたします。その後、神輿は田無1区を巡行しながら田無神社に立ち寄り、境内の津嶋神社前にて天王祭が斎行されます。さらに巡幸を続けたのち、夕刻に還御し、還幸祭が斎行されます。祭典の日程は、6月中旬以降、田無神社の公式HPでお知らせいたします。

### 向台大太鼓

7月12日(日)、向台大太鼓が社会福祉法人東京聖新会ハートフル/フローラ田無の正面玄関前広場から田無神社まで巡行し、地域の子どもたちが太鼓を曳きます。向台大太鼓の子ども太鼓曳き募集要項ならびに、向台大太鼓・津嶋神社神輿の田無神社到着時間などにつきましては、6月中旬以降

に田無神社公式ホームページにてお知らせいたします。

### 御田植祭

6月13日(土) 午後1時より、龍神池において御田植祭が斎行されます。御田植祭は、稲作の手順を儀礼化した古くから伝わる神事であり、田無神社では五穀豊穡を祈念して行われます。当日は、龍神池の浅瀬に稲の苗を植えつけ、豊かな実りを祈願いたします。収穫された稲は、10月の大祭において、神輿の鳳凰などに括り付けて奉納されます。

### 慰殿天王祭

悪疫退散の神として信仰される牛頭天王の夏祭りですが、兼務社である尉殿神社において、6月15日(月) 午後1時より斎行されます。牛頭天王は、疫病をはじめとする災厄を祓う御神徳を有する神として、古くから信仰されてきました。とりわけ夏は、暑さとともに疫病やさまざまな病が広まりやすい時期であることから、これらを鎮め、人々を守る神として広く崇敬されています。

### 三社祭

6月17日(水) 午前10時より、

大鵬土俵前において三社祭を斎行いたします。三社祭は、塩竈神社、煩大人神社、大鵬土俵の三社をお祀りする祭典です。

### 戦没者慰霊祭

8月15日(土) 正午より、日露戦争戦役記念碑前において慰霊祭を斎行いたします。一般の皆様にもご参列いただき、英霊に追悼の誠を捧げるとともに、感謝の意を奉告いたします。どなた様でもご参列のうえ、玉串拝礼をしていただけます。ご予約は不要ですので、正午までにお越しください。

### 初穂祭

8月23日(日) 午後2時より、兼務社である下保谷天神社において初穂祭を斎行いたします。初穂祭は、田の神への感謝を捧げるとともに、豊かな実りを寿ぐ祭礼です。

### 七夕てるてるトンネル

色とりどりのてるてる坊主で彩られた「七夕てるてるトンネル」は、6月13日(土)から7月21日(火)まで、田無神社境内に設置されます。七夕てるてるトンネルは、御祭神である級長津彦命・級長戸辺命に感謝を捧げるとともに、台風や

雨風などの災害がなく、農作物が順調に育つことを祈念して設置するものです。

ご参拝の皆様は、てるてる坊主の短冊に願いごとをご記入のうえ、トンネルに結びつけていただけます。「てるてる短冊」には顔を描き、お願いごとをお書きのうえ、トンネルに結びください。てるてる短冊は、おみくじ処にて、一体300円で頒布いたします。

### お人形感謝祭

田無神社では、お預かりしたお人形をお並べし、祝詞を奏上して感謝の意を捧げる「お人形感謝祭」を、毎年8月第1日曜日に執り行っております。

本年は、令和8年8月2日(日)に斎行いたします。詳細につきましては、「お人形感謝祭」のチラシ、または田無神社公式ホームページにてご確認ください。



津嶋の祭礼写真集

7月は、田無の夏を彩る「津嶋の天王祭」の季節です。真夏の強い陽射しのもと、お神輿が威勢よく担がれ、力強い掛け声が町中に響き渡ります。祭礼が始まると場の空気は引き締め、厳かな時間が流れます。にぎやかさの中にも緊張感が感じられる津嶋の祭礼。今もなお、多くの人々の手によって大切に守り伝えられています。ここに「津嶋の祭礼写真集」として23枚の写真を紹介します。







祭典と境内四季



令和8年 端午祭



令和7年 夏越大祓の茅の輪



令和7年 セタトンネル



令和7年 向台大太鼓祭典



令和8年 五穀豊穰春祭・電祭



令和7年 お人形感謝祭



令和8年 イチョウの花



令和7年 鯉のぼり